

B-3

聖マリア病院小児歯科における 唇顎口蓋裂児に関する実態調査

○藤崎みずほ、落合 聡、中田 稔*

聖マリア病院母子総合医療センター小児歯科、
九州大学歯学部小児歯科*

聖マリア病院小児歯科では、1982年開設以来、健常児とともに、心身障害児に対しても口腔の健康管理を主体に歯科治療を行ってきた。なかでも、唇顎口蓋裂児に関しては、1990年からHotz床を用いた早期治療を導入して、他科とのチームアプローチの下に、う蝕予防管理、矯正治療を行っている。

1995年に当科に初めて来院した患児480人のうち、何らかの障害をもつ患児は150人と全体の約3割を占めていたが、その中でも唇顎口蓋裂児は33人とCPに次いで多かった。また、ほとんどが院内からの紹介で、生後1週間以内の受診が18人と最も多く、生後1カ月以内が4人、生後1年以内が7人、生後1年以上は4人であった。

今回、開設以来当科を受診した唇顎口蓋裂児に関して、性別、来科の経緯、初診時年齢、裂型、等についての実態調査を行ったので、報告する。

B-4

聖マリア病院小児歯科における 唇顎口蓋裂児の治療システム

○落合 聡、藤崎みずほ、中田 稔*

聖マリア病院母子総合医療センター小児歯科
九州大学歯学部小児歯科学教室*

聖マリア病院では、総合病院の利点を生かして小児歯科、新生児科、形成外科、言語治療科、小児内科、耳鼻咽喉科、麻酔科および各々の看護スタッフ等が連携した唇顎口蓋裂に対するチームアプローチによる総合的治療を行っている。

当科は、唇顎口蓋裂によって引き起こされる上顎の形態異常や哺乳および咀嚼障害等を改善するための重要な役割を担っている。新生児期においては、哺乳障害の除去、上顎歯槽弓形態の改善、披裂幅の狭小化および舌の正常位置への誘導を目的としてHotz床を装着管理している。そして口唇および口蓋形成手術が終了する乳幼児期では、う蝕予防および治療、さらに永久歯の萌出期である学童期からは矯正治療を開始し、永久歯列完成期までの歯科管理を行っている。このように小児歯科は、出生直後から成人に至るまでの長期間にわたって口腔内の機能および形態の育成に関与している。今回、唇顎口蓋裂のチームアプローチ治療における小児歯科の役割とその治療システムの詳細について報告する。